

糖尿病のキーワード&ケア／透析合併症の予防と治療

2020年11月20日発行・発売（毎月20日発行・発売）
第40巻第14号（通巻535号）ISSN0389-8326

月刊 ナーシング

Nursing

12

2020
Vol.40 No.14

特集1

- ・ サルコペニア
- ・ GLP-1
受容体作動薬
- ・ がん
- ・ 膠原病
- ・ 糖尿病腎症

糖尿病

いま気になる

キーワード&ケア

特別寄稿

COVID-19
と
糖尿病

特集2

個別ケアにつなげる
透析合併症の
予防と治療

Gakken

\\ 第4回 //

日本のナースへ贈る



世界の看護

外国人看護師を受け入れる現場は？海外で働く日本の看護師はどう過ごしているの…？日本と海外を結ぶ看護に精通する園田友紀さんが、毎月、world wideな現場をお届けする連載です。

公益財団法人ときわ会常磐病院看護部 EPA事業看護師受け入れ推進室、福島県立医科大学大学院公衆衛生学講座修士課程看護師/保健師 園田友紀



日本人看護師が外国人看護師と一緒に働いて感じたこと

\\ はじめに //

日本とインドネシア、フィリピン、ベトナムの各国間で結ばれた経済連携協定(Economic Partnership Agreement, 以下EPA)による外国人看護師候補生の受け入れは2008年に始まり、現在まで1,421人の外国人看護師が来日しています。私が働く常磐病院(福島県いわき市)では、2015年からベトナム人看護師の受け入れを行っており、現在5人の看護師と3人の看護師候補者とともに働いています。これまで3回にわたり、ベトナム人看護師の視点からベトナムと日本の看護の違いや日本の病院で働く中で感じたことをお伝えしてきました。第4回はベトナム人看護師とともに働くプリセプターと病棟師長の2人へのインタビューから、外国人看護師と働く実際と課題、そして今後の展開についてお伝えします。

CROSS



園田

ベトナム人看護師の受け入れ

園田 富樫さんは北3病棟(腎臓内科・一般内科混合病棟)でルオンさん(当院で受け入れた3人目のベトナム人看護師、2018年に看護師国家試験合格し、内科病棟にて勤務)が看護補助者のときからかかわっていますね。所属部署での受け入れが決まって、率直に感じたことを教えてください。

富樫 すでに療養病棟で働いていることは知っていて、ハインさん(当院で受け入れた2人目のベトナム人看護師、2017年度看護師国家試験合格後、療養病棟から泌尿器科病棟へ異動)の例もあったので、スタッフ間では「どうなるの?」と抵抗はありませんでした。むしろ、皆ルオンさんに興味をもって、よくかかわっていましたね。

園田 そんな中、富樫さんがプリセプターになったのはどのような経緯だったのでしょうか?

富樫 北3病棟(腎臓内科・一般内科混合病棟)では看護師候補者として受け入れたときから、基本的に看護師を担当に付けて一緒に動くような体制にしていました。ただ業務が忙しく教えられないという方の代わりに担当することがあり、その中で彼女の看護技術や日本語の理解度を把握していたこともあり、立候補しました。

園田 プリセプターになることに躊躇はなかったんですね。ルオンさんと働きやすい環境を築けた要因は何だったのでしょうか?

富樫 全然抵抗はなかったです。まず年齢が近かったことは大きかったですね。あとは本人の人柄でしょうか。スタッフ



富樫

がいていないではない日本語を使っても、わからないなりに一生懸命聞こうとする姿勢であったり、患者さんへの優しい対応であったり、ベトナムのことを聞いてもすごく気さくに答えてくれました。私自身、今後、日本の新人看護師に教える機会はあるだろうけど、ベトナム人に教える機会は少ないだろうし、この経験が自分の成長や財産になるのではないかと思います。

コミュニケーションの実際と工夫

園田 富樫さんは看護師3年目で日本人のプリセプターを担当したとのことですが、ルオンさんとの違いはありましたか?

富樫 日本人の場合は、年下だし、看護師としても未経験なので、白紙のページにこちらが書き込んでいくというイメージでした。一方、ルオンさんはベトナムで看護師経験があり、年上でプライドもある。だからこそ敬意を示しつつ、指摘をする際には、嫌な気持ちにさせないような伝え方、教え方に注意していました。ほかには、自分がいかにわかりやすく噛み砕いた説明ができるか、そしてこちらがわかった気になっていないか確認のため「今、私が何を言ったか言ってみて」と聞き返すようにしていました。

最初は英語のほうがよいのかなと思ったのですが、「英語は全然わからない。漢字のほうがよい」と言われた経緯もあり、口頭で伝わらないときには紙に漢字で書き直すこともあり、現場には医療材料や薬剤、術式などの専門用語の



左から順に高崎主任、ルオンさん、富岡さん、少し怖く見えますが、頼れる先輩たちです。

略語や英語、現場独自の言い回しがありますが、ルオンさんはそれらを一つひとつを細かくメモして、順応してっていましたね。

園田 ほかにコミュニケーションで気をつけていたことはありましたか？

富岡 最初は一緒に患者のベッドサイドに行き、できるだけ日本人である自分と外国人のルオンさんの感覚を一緒にしようと思っていました。私たちと専門学校や大学で学んできたカリキュラムが違うし、文化の違いや感覚の違いをすり合わせて、引っ張っていかればいかなって。患者を診るのと一緒に、アセスメントしながら2〜3カ月間ねっとりかかわりました。

園田 患者さんとかかわる中で、日本の看護師と異なる対応やとらえ方はありましたか？

富岡 ルオンさんは看護師候補者の頃からオムツ交換や清拭など、患者さんにかかわることを積極的に取り組んでくれましたが、「家族が来ない患者さんはかわいそう。孤独だからやってあげたい」と言うんです。私たちにとって生活援助は当たり前すぎて、ルオンさんから指摘されるまで、「一人で入院生活を送る患者さんに対しかわいそう」という感覚自体を忘れていたことに気付かされました。

また、看護技術は大体できるのですが、日本の看護師より大雑把だなという感覚はありますね。たとえば、点滴のオー

ダーが複数出ていると、「順番の指示もないですし、どれからやってもよいんですか？」と聞かれたことがありました。日本の看護師だと「いやいや、上から順番にやろうよ。そのほうがインシデント起こりにくいじゃない」ってなりそうですよ。

外国人だからこそ できるケアを

園田 ケアをする中で、彼女たちの特徴や同僚としてのかかわり方が見えてきたと思うのですが、患者さんからの反応はどうでしたか？

富岡 「がんばっているよね」「心と心で通じるよ」とおおむねよい評判でした。外国人看護師から患者さんへ「何ですか？」と聞き返すこともあります。それも含め患者さんの側にいる時間が長くなるので、患者さん側は話を一生懸命聞いてくれると思って頂いたのかもしれませんが。

一方で“外国人看護師は遠慮したい”とおっしゃる患者さんも3カ月に一人くらいはいました。すべての訴えを聞き入れることは難しいのでスタッフで妥協点を探し、患者さんが納得しなければ、主任や師長から説明してもらい「嫌なことを言われたり、されたら言ってくださいね」と申し添えて、極力一緒にケアに入るようにしていました。

また、ベトナム人の患者さんが腎生検で入院するなど、外国人の患者さんが入院することもあります。そんなときは患者さんとスタッフとの間で通訳をしてくれたり、ベトナム人に限らず外国人患者さんが入院されたときは、寂しさや不安な気持ちを誰よりも体感しているからこそ、精神的な介入を担当してもらっています。日本の看護師に得意不得意があるように、ルオンさんにも得意分野を生かして病棟で活躍してもらうことで、スタッフとの信頼関係を築けるよう心掛けてきました。

去年は1年目でした。波はあれど、関係性も含め軌道に乗せられたかなと思っています。一方で日本の看護師の成長と比較すると、3年を終えてやっと日本でいう1年目が終わるレベルかなという感覚なので、今、日本の看護師でいう1年目の3分の1という感じ。まだまだ教えたいことはいっぱいありますし、今後も一緒にがんばっていききたいですね。

地方の看護師不足と 外国人看護師

園田 富岡師長は2017年に採用面接と病院見学のためにハノイに行かれ、実際に3人のベトナム人看護師と泌尿器科病棟、内科病棟で関わっていますね。彼らの受け入れ当初、どのように思われましたか？

富岡 2018年からハインさんと泌尿器科病棟で、ルオンさん、チャウさんとは今年2月から内科病棟で一緒に働いています。部署で受け入れが決まったときは、率直にそんな時代になったんだなと思いました。以前から、超高齢社会によって医療介護ニーズが高まっている中、少子化の中で看護師という職業が選ばれるのか？という問題意識がありました。とくに地方では慢性的に看護師不足です。地元で看護学校を卒業しても、就職は都市部ということは少なくありません。将来的に看護の担い手が足りなくなれば、いずれ外国人に手を借りる必要が出てくるとは薄々考えていました。だからこそ、今回EPAの受け入れが決まったときに大きな抵抗はなく、「具体的にどのように動いていったらよいか考えよう」という感じでした。

園田 師長自身はそれまでの気持ちの準備もありフラットに受け入れられたんですね。一方、外国人看護師と直接かかわったり、指導するプリセプターやスタッフからの受け入れにともなう抵抗感や不安などはありませんでしたか？師長としてのスタッフへのかかわりについて教えてください。

富岡 それが思いのほか、スタッフはスムーズに受け入れ、教育・指導に取り組んでくれました。その背景や要因を自身



富岡師長

の看護研究として調べたのですが、外国人看護師候補者として他部署で働いている存在を認識していたことが、ほかの職員の異動と変わらないような受け入れにつながっていたようでした。配属後は確かに言葉やコミュニケーション、文化の違いへの対応に対する不安はありました。しかし、話がうまく伝わっているか確認していたり、理解しやすいように噛み砕いて説明したりするなどコミュニケーションの工夫がみられました。また、自己流ではなくあらためてテキスト等で技術を学び直したりとスタッフ自らが率先して取り組んでいました。

あと、私自身は指導者に対しベトナム人看護師個人との違いに終始するのではなく、今後外国人と一緒に働くことが一般的になるかもしれない中、先駆けとして自分たちはどのようにかかわっていくのか、発想の転換や視点の変化を促すよう問いかけていました。スタッフは現場の業務で手一杯になってしまっていますが、師長だからこそ知りうる情報もあるので、朝のミーティングや休憩時には積極的に情報を流すように心掛けていましたね。

実際に働く中で見えてきた、 ベトナム人看護師のよい点と課題

園田 看護研究を拝見しましたが病棟の教育的雰囲気に加え



家族を日本に呼び寄せる手続きは書類の準備がとても煩雑なので、生活支援担当の若松さんにお世話になりっぱなしです。

て、単科の泌尿器科であったことも育成に有効だったのではと考察されていますね。そのような環境の中、実際、彼女たちと現場で働く中で見えてきたよい点や課題を教えてください。

富岡 よい点は仕事を選ばないことです。100%理解できたかは別として、「はい、わかりました」と、すぐに返事が返ってきます。目の前にある仕事に対しての一生懸命さや前向きさがすごく伝わってきます。困った点は、たまに「日本語がわかりません」って逃げってしまう時。こちらが噛み砕いてわかりやすい言葉を選んで話しても、「日本語がわかりません」と言われることが何回かあります。でもそういったときは、疲れているのかなって様子を見るようにしています。

園田 本人のキャパシティやモチベーションが日々変わる中、モチベーションが下がっていると感じたエピソードはありますか。

富岡 「日本語がわかりません」と言えば、現場は慌ただしく動いているので、「じゃあほかの人に頼むわ」となってしまう。急いでいて時間をかけられないときに、これを言えばスルーしてもらえ言葉になっている現状はありますね。

園田 それに対し、現場ではどのようにかかわっていったのでしょうか？

富岡 その場で解決できない場合は、必ず後で振り返りを行い、指導し直すことをプリセプターと決めていました。ベトナムで看護師の経験があるので基本的なことはわかるけど、細かい点を理解してもらえような言葉を選んだり、わかるように教えないといけません。どうしても日本の看護師が一方的に話しがちになってしまいがちですが、振り返りのときは、伝わっていないんだな、と教える側もあらためて捉え直す機会にしていました。

仕事だけではなく生活全般を通じたスキルアップを

園田 以前お話を伺った際には、「患者のニーズに合わせて検査や治療の説明をどのようにさせていくかが課題」とおっしゃっていましたが、彼女たちの課題は言葉・コミュニケーションだけなのでしょうか？

富岡 看護師国家試験を通して基本的なことは学んできているので、後は実践能力の問題ですね。患者さんに対して理解しやすいような喋り方をするんだとか、配属先の特徴を踏まえ疾患を深く掘り下げて勉強するようにといったアドバイスはしています。

園田 それは日本の新人さんも変わらないですね。

富岡 ですから日本の看護師、ベトナム人って違いはないと思うんです。ただ日本語能力の差はあるかもしれないけど、そこは倍、勉強しなさいと言っています。だいたいハインさんたち、うまくなったんじゃないかな。

園田 私がかかわっていた候補者のときと比べてスムーズになりましたね。やはり現場で働いている分、自然な話し方になっている気がします。

富岡 主任はアプリを使ってベトナム語で伝えることで踏み込んで理解してもらえかもと考え、かかわっていましたが、私はあえて日本語で伝えるようにしていました。言葉が足りなかったりした場合は、「何を言っているかわからないから、わかるように説明して」と返しています。そのように声かけをすることで、自分の説明や伝え方について常に考えるように促していました。今日、偶然ハインさんのサマリーを見ましたが、以前よりわかりやすくなっていましたね。すこしずつですが、端的に書くこと・伝えることが、定着してきたのではないのでしょうか。

園田 看護のポイントを押さえることに加えて、日本語での表現はずっと課題ですね。

富岡 1年や2年で結果を求めるのは早いとは実感しています。当院にはモンゴル出身の准看護師がいますが、スムーズ

に話せるようになるまで10年かかりました。現場だけではなく子どもが学校に行ったりする中で話す機会が増え、徐々にうまくなってきたとのことでした。5年10年かけて、ようやくできたときは大変だったよねって話ができると思いますね。

園田 そう言った意味で、当院のベトナム人看護師もお子さんや配偶者を母国から呼び寄せたり、出産があったりとライフスタイルが変化する中で、仕事の場面以外で日本語を使う場が増えることはよい影響になると思っています。

患者さんからの受け入れと今後の展望

園田 ベトナム人看護師に対する患者さんからの反応はいかがでしょうか？

富岡 直接話すことはなくても、看護師のシャドー期間で一緒に動いている時期があったので、徐々に患者さんに認知され、受け持ちを増やしていきました。こちらで性格や社会性を考慮して、難しい患者さんは担当から外していましたが、あと外国人看護師は標準語で学んできているので、日本語の方言がとても強い患者さんやイントネーションに癖がある患者さんのときは担当を変えることもありました。患者さん自身は慣れない外国人看護師で不安でしょうから、病室に伺った際には「外国人看護師でわからないことがあれば、ほかの看護師に声をかけてください」とフォローしています。でも「外国から来てくれたの。これからの時代、そんな看護師さんもないとダメだよ」と応援してくれる患者さん多いらしいですね。

園田 彼女たちががんばる中で徐々に認識され、受け入れられていくのでしょうか。

富岡 私たちの病院のように外国人看護師を受け入れる病院はまだ少ないと思います。でも冒頭で触れたように看護師が慢性的に不足している中で、日本の若者から選ばれる職業を目指すことも大事ですが、外国人と働くという選択肢があってもいいと思います。現時点ではなかなか生の声を聞いたり、情報共有をする場がないのですが、今までの実践例など、具体的な方策や運用について活発に話し合い発信する場があれば、もっと受け入れる病院が増えていくかとも思いますね。

ご質問・ご意見募集！

連絡先 Mail : sonoday0828@gmail.com Twitter : sonoday3
Twitterでハッシュタグ #世界の看護 をつけて感想やご意見、ご質問など聞かせて下さい！誌面でご紹介する際には、メールもしくはDM（ダイレクトメッセージ）にてご連絡いたします。



女性の支援を行う国際ソロプチミストアメリカ日本北リジョン大会においてハインさんが連盟賞を受賞し、富岡師長と式典に参加しました。日本で資格を取り看護師として働くハインさんを地元いわきマリンクラブの皆様が推薦して下さいました。

連載の予定

次号

2021年
1月号

外国人患者を受け入れる際に注意すべき点

2月号

海外の病院で勤務する日本人看護師へインタビュー
(EPA看護師と逆の立場)

3月号

外国人看護師が日本の国家試験を受けるにあたり
苦労したこと